

## 感情体験の分析 (X)

—後悔について—

鈴木 賢 男

### Analysis of Some Emotional Experiences (10th report): On Regret

Masao Suzuki

This is the 10th report of successive studies on analysis of some emotional experiences. In this study I aim to analyze the experience of regret. 586 free descriptions in 607 written subjects were adopted as available data. These descriptions were classified in 50 scenes, and then classified into 12 patterns. Finally, these were organized in 3 themes about relations to one-self. That is (1) loss of contact with a familiar person, (2) loss of balance in regular life, (3) loss of accomplishment about goals. In the next step were made up frequencies of these scenes, patterns, or themes, and investigated those means. The conclusions showed that constitution of experience about regret has 6 elements. That is A) themes, B) lack of threshold level about aspiration, C) lack of threshold level about consciousness, D) lack of threshold level about coping, E) loss as a corollary, F) agent is one's own self.

#### はじめに

本研究は、特定の感情に関する感情体験に基づいて、その感情の特徴を分析するという一連の研究の第10報であり、ここでは「後悔」という感情について取り上げることにする。感情体験の分析は、ある感情を最

も強く感じた体験について自由記述させ、そこから、その感情を特徴づける基本構造を導き出すことを目的としているが、いずれの感情においても調査対象者が記述するそれぞれの場面の中で、ほとんどの場合、ある人物・物・出来事(対象)が自分(主体)に何らかの影響をもたらしていたことを中心とした内容が描写されていた(例:喜びの場合、「バイトをして自分がほしかった物を購入した時」)。つまり、対象となるものを、ただ中性的に知覚した命題的なものとして記憶していたのではなく、個人にとって意味あることがもたらされ何かしらの自分への影響が生じる(喜びでは、自分にとって大事なものを手にできたことによるポジティブな状態)ところまでもが知覚され、一連の過程としてのエピソードとなっていたのである。確かに、実生活上では、必ずしもその過程を自覚的に意識しているとは考えにくい、感情の認知説では、自分にとっての意味を判断する心的過程をアプライザル(appraisal; 評価)と名付けており、「直接的、即時的なもので、幸福か不幸かについての意味判断(Arnold, M. B. 1960)」とする極めて直感的な認知が感情に先行するという考えを提起している。また、その意味は、事前の個人の目的や意図に対する価値判断として成立するものであるとも言われている。エピソードには、このような意味や評価を理解するために必要な内容が直接的、間接的に表現されていると思われるのである。

本研究による感情体験は、あくまでも過去の体験が想起されたものである、実際のその場での一個人の“意味”や“評価”を必ずしも的確に十分に保証するものとはなりにくい。しかし、多数の人の体験内容を得ることによって、提示された多種多様な表現から、言語的な意味を媒介とした「場面」についての類似点や相違点を仮定することができ、これを分類することで同一感情(同一概念として言語的に表現される感情)とされる体験の中にも多様な意味を抽出することが可能となった。

したがって、特定の場面にのみあてはまるような単一な意味や評価構造に集約させることなく、比較的、実生活上に即した特定感情の多様で豊かな様相を多角構造的に見出しながら、なおかつ、最も中心となるような普遍的な意味を導き出すことができるものとする。更に、感情体験の記述には、その印象に残る体験をしたとするおおよその年齢が明記されており、比較的年齢段階の低い時に仮定される意味や評価を併せて検討することで、その感情の原初的性質をも考えうるものとなっている。

本報告（第10報）にいたるまでに取り上げた感情は「嫉妬・憎い・怒り（第1報2002年）」「喜び・悲しい（第2報2002年）」「驚き・寂しい・愛しい・空しい（第3報2003年）」「失望（第4報2003年）」「屈辱（第5報2004年）」「恐れ・充実・恥ずかしい（第6報2004年）」「満足（第7報2006年）」「嫌悪（第8報2007年）」「ためらい（第9報2008年）」の17感情にのほり、それぞれの感情の特徴を見出し得てきたが、そこに通貫する一貫したモデルは、自分（主体）と対象（客体）には有益あるいは有害の関連性があるというものであり、その関連性が変異するか否かで特定の感情が体験されるというものであった。このことは、ラザルス（Smith, C. A. & Lazarus, R. S., 1993）が感情的な意味の要約として名付けたcore relational themes（中心的関係テーマ）の考えに沿うものであり、例えば、ラザルスでは、悲しみの中心関係テーマは「取り返しのつかない喪失を経験」としたわけだが、筆者らの研究でもそれとはほぼ同様な「自分にとって大切なモノを失う（鈴木賢男・鈴木国威・上杉喬, 2002）」ことを中核的な関連性として認めることとなった。

しかしながら、もう一方で、感情はこの有益・有害の関連性が単一に変異することだけではなく、どのような作用を受けて変異したのか（作用性）が、意味判断には必要なものとなることを予見するものとなっている。例えば、上述した「悲しみ」の場合、「自分自身の力ではどう

しようもできない」というような作用をうけており、有益な関連性を維持できなくなることが「主体が対処しようにも無理である」ことを特徴としてあげるものとなった。典型的には、自分の家族の死を迎えることが具体的場面としてあげられるが、まさに、愛している人なのに、その死に対してなすすべがないという作用性があるが故に、回復不能の喪失となり、いわゆる悲しみとして体験されるものと確認された。感情に関する認知構造説では、このような作用についての考え方をより発展させて次元（作用性の選択的判断）を複数取り上げて、その次元の判定のパターンによって特定の感情が生起するとしている。例えば、Roseman, I. J. (1984) は、5つの次元によって、17の感情を分類しようとした。

本報告では、ラザルスやローズマンと同様に感情間の区別をつける仕組みや感情に関する統合的モデルを提示することを視野にしつつも、「後悔」という感情体験における自由記述に対して、第9報までと同様に、同一の感情内に、一定程度に細分化された関連性の意味の相異を見出すことで、分類間における共通性をより明確にさせ、共通とされた関連性および関連性の変異に作用する特有の要因を仮定し、その上で、「後悔」の感情が生起する特徴を検討するものである。

## 方 法

### 1. 調査質問紙

本研究で使用した質問紙は「体験した感情」として嫉妬、後悔、憎い、満足、屈辱、空しい、愛しい、不安、喜び、苦しい、驚き、恐れ、怒り、寂しい、充実、嫌悪、ためらい、恥ずかしい、悲しい、失望の20感情を挙げ、「あなたの今までの体験の中で、次の1から20のような感情を最も強く抱いた体験・出来事を思い出して、それがどんな出来事だったのか、分かるように書いて下さい。また、その出来事がいつ頃（何才位）

の事なのかも書いて下さい」と教示し、「その感情を体験した出来事」を30字程度のスペースに自由記述するものであった。

## 2. 調査対象者・時期・手続き

B大学の「感情心理学」の授業において、1999年度（227名）、2000年度（190名）、2001年度（190名）の受講生、合計607名（男性203名、女性404名）を対象に、授業初日に調査用紙を配布し、翌週の授業で回収という手続きをとった。調査は記名式で行われた。

## 3. 感情体験時の年齢

「後悔」に関しては、記述された出来事に対して単一の年齢が特定された人数は578名（95.2%）だった。複数の年齢が記述されていた場合には、その感情を強く抱いた初めての年齢（例：5才、15才→5才）を採用し、年齢に幅があるような記述に対しては、中央値（例：高校生→16才）を採用することで、体験時の年齢を特定させることにした。年齢が特定できなかったものは、年齢そのものが未記入だったものと、「いつも」「常に」などのような随時的で不定な表現をとるものについてであった。

## 4. 後悔の体験の分類

調査対象者607名のうち、具体的に「後悔」体験の内容を明記した者は594名（97.9%）であり、未記入・特になしは10名（1.6%）、後悔など体験していないとする者が2名（0.3%）、ありすぎて思い出せないとする者は1名（0.2%）であった。内容を明記した594名の中で、その場面の感情的意味を容易に特定できない記述（例：プールに入れなかった）をする者が8名（1.3%）であったので、分析の対象とした対象者は

これらを除く586名(96.5%)となった。

4-1. 後悔の対象(何を後悔したのか)による分類 後悔体験の586名の記述から、後悔感情を体験した本人との「関連性およびその変異」の類似性について分類したところ、次の50の場面特性(1)～50)に区分することができ、50場面はさらに12の価値類型(①～⑫)にまとめることができた。そして、これらの類型は最終的に3つの主題体系(I～Ⅲ)としてまとめることができた。以下に、各分類項目に含まれる具体例と体験者の性別、体験時の年齢を示した。

### I 情愛を結ぶ接点を失った状態

#### ①身近な人への過失(閉塞)

- 1) 相手を傷つけてしまっていた場合:「ちょっとしたことから、心無い言葉で友人を傷つけてしまいそのことが後々まで、残ったとき(男性11才)」「母親と口喧嘩をして、ひどい事を言ってしまった時(女17)」「恋愛においてだが、自分が相手に誤解を持ちひどく責めたててしまい、その後誤解が間違っていたと気付いたとき(男18)」
- 2) 薄情な対応をしてしまっていた場合:「老いていく祖父に優しくいたわってあげられないで、逝かせてしまったこと(女16)」「中学1年のとき、なくなった友達が入院しているとき、お見舞いに行かなかったこと(女12)」「ある友達が悩んでいるのに力にならなかった(女16)」
- 3) 素直になれなくなってしまっていた場合:「好きな男の子がくれると言ったプレゼントを素直に受け取らなかったこと(女12)」「兄が優勝した時、素直におめでとうといえなかった時(女16)」
- 4) 迷惑をかけてしまっていた場合:「運動会のとき、自分の役割を理解できず、周りの人に迷惑をかけたこと(女12)」「バイトで失敗

して周りの人に迷惑をかけたとき (女20)』

②身近な人との関係の悪化 (崩壊)

- 5) 恋愛関係が破局してしまっていた場合:「付き合っていた大好きな彼氏と別れた (自分から言い出してしまったこと) (女14)」「彼女にふられたこと (男19)」
- 6) 友人関係が断絶してしまっていた場合:「無視し続けた友人に「ごめん」を言えずに卒業し、会わなくなったこと (女15)」「仲の良かった友達と喧嘩をして、仲直りできずに転校してしまった (女10)」
- 7) 友人関係が悪くなってしまっていた場合:「友達とけんかをしてしまったとき (女4)」「高校の時に相性の合わない友人がいて喧嘩をしたが、本当は喧嘩などしなければよかったと思った時 (男16)」
- 8) 関係に亀裂が入ってしまっていた場合:「仲のよかった友達に告白してフラれて、その後の二人の間がギクシャクしてしまって、「ああ、いうんじゃないかった」 (女14)」「付き合った人と嫌な形で別れたこと (男19)」

③身近な人への不実 (脆弱)

- 9) 虚構の関係を築こうとしてしまっていた場合:「好きでもない人と付き合った後 (女19)」「今考えればそんなに好きでもなかった人に自分のうぬぼれた気持ちで告白したこと (女18)」
- 10) 関係に虚偽をはさんでしまっていた場合:「彼女と別れる時に、別れなかったこと (男17)」「本当は嫌なのに、その気持ちを我慢して友達に譲ったとき (女20)」

II 日常における平静を失った状態

④悪い行いをしてしまっていた (罪悪)

- 11) 法律違反を犯してしまっていた場合:「近くのスーパーからかわい

- いリップを無断で持って帰ってきてしまったとき (女6)」「自転車を盗んで警察に捕まって、母が泣いてしまった時 (女18)」
- 12) 不正行為をしてしまっていた場合：「お金のことで、嘘をついたのがばれて、ひどくしかられたとき (女10)」「高校生の頃ズルをして、テストを受けて、成績上位者に載ってしまったとき (男17)」
- 13) 不当な行為をしてしまっていた場合：「『いじめ』に参加していたこと (男15)」「友達の秘密を話してしまってそれがバレてしまった (女10)」
- 14) 義務に反する行為をしてしまっていた場合：「困っているように見えた人に何の声もかけられなかったとき (男17)」「弟の周期性嘔吐の原因が自分の言葉であろうということ (女7)」
- 15) その他の特殊な場合：「浮気をしたこと (女18)」「いじめにより自殺未遂をおこしたとき (男10)」
- ⑤思わぬ痛手を受けてしまっていた (失策)
- 16) 思惑が外れてしまっていた場合：「電車を一本遅らせたら、電車が途中でとまってしまい、新幹線に乗り遅れたとき (女19)」「髪を切りにいったらその店が下手で変な髪型になった (男17)」
- 17) 自業自得になってしまっていた場合：「ダイエットがうまくいったのに、つい気がゆるんで、たくさん食べて、体脂肪が増えたとき (女17)」「泥酔して気付いたら留置所にいたこと (男21)」
- 18) 厚意が裏目に出てしまっていた場合：「友達の為によかれと思ってした事が逆に辛い思いをさせることになってしまった (女18)」「友達の喧嘩の仲立ちをして失敗 (男12)」
- 19) 叱責を受けることになってしまっていた場合：「薬害エイズの話を実話のときに持ち出して、友達にこっぴどくしかられたとき (女16)」「高校の修学旅行で部屋を抜け出して、先生に見つかったこ

と(女16)』

- 20) 寝過ごしてしまっていた場合：「せっかく一度起きたのに寝てしまって、気付いたら一時間も過ぎていた。そして遅刻してしまった時(女20)」「寝過ごした時(男13)」
- 21) 肝心な事をし忘れていた場合：「小学生の時、ダンスの発表で直前に打ち合わせをしてラストを変えたのに、夢中になり、すっかり忘れてしまったこと(女12)」「自転車に乗っていて車と接触して怪我した時に、車に乗っていた人の住所や電話番号を遠慮して聞かなかった(女17)」
- 22) 自分のことを暴露してしまっていた場合：「相手をよく見極めずに、自分の事を相談してしまった時(女19)」「留年通知と、友達にそれを伝えた時(男21)」
- ⑥行き過ぎな行いをしてしまっていた(過大)
- 23) 衝動買いをしてしまっていた場合：「衝動買いをしてしまって、お金がなくなったこと(女19)」「無駄な買い物をしてしまった時(男19)」
- 24) 過剰に摂取してしまっていた場合：「甘い物を夜中食べ過ぎたとき(女18)」「お酒を飲みすぎて気持ち悪くなり吐いた(男17)」
- 25) 自分本位になってしまっていた場合：「友達の意見を尊重せず、自分の主張ばかり言った(女15)」「自分の機嫌が悪いときに他人に八つ当たりしたこと(女19)」
- 26) 言動が軽薄になってしまっていた場合：「勢いに乗ってよく考えずに行動してしまった(女18)」「自己顕示欲にとらわれて、軽はずみな行動を取ったとき(男20)」
- ⑦復元困難な状況を自ら招いてしまっていた(自損)
- 27) 深刻な怪我をしてしまっていた場合：「足の怪我のせいで、運動部

を続けられなくなってしまったと知ったとき。怪我に至った自分の不注意さに後悔した(女11)」「スポーツをやり過ぎて怪我をしてしまった事と、事故をうまく回避できなくて大きな怪我、精神的ダメージを負い過ぎてしまったこと(男18)」

- 28) 甚大な被害を受けてしまっていた場合：「自分の飛び出しが原因で事故にあってしまったこと(女6)」「パソコンに保存しておいた文書を間違えて消してしまった(女19)」
- 29) 大事な物を無くしてしまっていた場合：「自分が気に入っていた物を、うっかりどこかに置き忘れたとき(女18)」「大事な時計を道に落とした(男11)」

### Ⅲ 目的に対する成果を失った状態

#### ⑧ 中途半端になってしまっていた(半端)

- 30) 学習が不足してしまっていた場合：「学校の授業に全くついていけなくなったとき、もっと真面目にやっておけばよかったと思った(女14)」「海外旅行に行った時、英語がしゃべれなくて困って、今まで勉強してこなかったことを後悔した(女19)」
- 31) 時間を浪費してしまっていた場合：「今まで生きていた中でTVを見過ぎた時間(女、年令不明)」「受験生(2年目)なのに、丸一日遊びに行ったとき(男20)」
- 32) 練習が不足してしまっていた場合：「高校の部活動をもっと真剣にやっていたらよかった(男17)」「ピアノを習っていたけど、真面目にやっていたらなかった。今になるともっと頑張れば良かった(女18)」
- 33) 開始が遅くなってしまっていた場合：「高校三年の時、年が明けても受験勉強が全然進まなかったこと(男18)」「祖父の癌が手遅れと分ったとき、早く検査を受けてもらわなかったこと(女17)」

34) 経験をせずに終わってしまっていた場合：「中学時代にサッカー部に入りたかったが、サッカー部がなかった。周りの友達にもサッカーをやりたいと思う人が多かったので、皆で創設すればよかった(男12)」「小さいときから人とは違う何かをやったりいろんなことをして、特技を作っておくべきだったと後悔している(女、年齢不明)」

⑨機会を失ってしまっていた(逸機)

35) 伝えられなくなってしまっていた場合：「転校する子に何も言えなかった(女8)」「あまりに常識や世間であるべき姿を重視または厳守し過ぎて自分の素直な感情、気持ちを伝えられなかった事(男17)」

36) 参加が出来なくなってしまっていた場合：「大学受験期に数学の単位を持ってないから公立受験が出来なかった(女18)」「センター試験に応募することを忘れてて受けられなかった時(男19)」

37) 告白をせずに終わってしまっていた場合：「好きな相手に自分の気持ちをどうしても伝えられなかった時(女17)」「好きな人に自分の想いを告げずにいたら、後にその人が他の人と付き合ってしまったとき(女19)」

38) 手に入れられなくなってしまっていた場合：「買い物に行って、すごく迷って結局買わなかった服がやっぱり欲しくて、次に行ったらもうなかった(女19)」「円高で70円台に入った時、\$に変えておけばよかった(男17)」

⑩関わることをやめてしまっていた(放棄)

39) 申し入れを断ってしまっていた場合：「告白を断った(女18)」「慶応生のデートの誘いを断ったこと(女20)」

40) 活動を途中で放棄してしまっていた場合：「小学五年ぐらいから

習っていたダンスを辞めてしまったとき (女15)」「高校時、部活を引退前に辞めたとき (男17)」

①決着が着いてしまっていた (敗退)

- 41) 試合に負けてしまっていた場合：「高校野球で甲子園の切符に手が届かなかったとき (男18)」「マラソン大会で最後の直線で抜かれたこと (女17)」「中学ラストの部活の試合に負けたこと (男14)」
- 42) 上手にできなくなってしまう場合：「車の教習所で、落ちついてやればできるのにちょっとつかれて、補習になってしまったこと (女20)」「小学校の時、全校生徒の前で、発表する事があって、失敗した。もっと考えてから発表すればよかったと思った (男7)」「試験終了までに問題が最後までとき終わらなかったとき (女16)」
- 43) 受験に不合格になってしまっていた場合：「受験勉強をしなくて推薦入試に落ちたこと (女18)」「高校受験失敗 (もっと勉強しておけば) (男15)」「大学受験に現役合格しなかったとき (女18)」
- 44) 評価が下がってしまっていた場合：「中間、期末 (受験) 前期、後期のテストの結果が返ってきたとき (男16)」「怠けていたら成績が落ちた (男15)」「テスト勉強をあまりしないでテストを受けて、悪い点をとったとき (女16)」
- 45) 落第をしてしまっていた場合：「運転免許がとれなかった (女19)」「授業で、単位を落としたこと (男19)」
- 46) 選抜に漏れてしまっていた場合：「中学校の部活で、最後の大会に出られなかった時 (女15)」「部活動でレギュラーになれなかった時 (男17)」

②不本意な選択をしてしまっていた (錯誤)

- 47) 適性の無さを感じてしまっていた場合：「ピアノを習い始めた頃、「自分には向いていない」と思った (女6)」「やりたくて入ったは

ずの部が、全く想像と違い、楽しくなかった時 (女18)」

- 48) 入学後に懸念を感じてしまっていた場合：「高校に入って、すぐのオリエンテーションで、教師の志の低い学校にはいったと実感したとき (男15)」 「期待して行った高校がつまらないと思って違う高校に行けば良かったと思ったこと (女16)」 「第一志望だったにもかかわらず自分には合わない高校だったと気付いたこと (女15)」
- 49) 妥協をしてしまっていた場合：「大学受験で、志望をどんどんあきらめ、妥協してしまったこと。落ちてもいいから、受けておけば後悔は少なかったと思う (女18)」 「皆が入ったからという理由でやりたくない剣道部に入ったとき (女12)」 「自分の望んでいたのとは違うもの (おもちゃ) を購入したとき (男6)」
- 50) 進路に誤りを感じてしまっていた場合：「進路選択をあやまったかもしれないと思ったこと (女18)」 「理系を選ばなかった時 (男16)」

4-2. 後悔にいたる状態 (どのような作用で後悔したのか) による分類  
後悔体験の記述から、後悔を生起させる関連性の変異がどのような作用を受けてもたらされたのか、その「作用因および作用状態」について分類したところ、586名の記述は次の6種類に区分することができた。

A. 規範に適合しうるような自制が効かなかった

a. 制動不足：衝動を抑えきれなかった

例えば、「友達と喧嘩をして、言い過ぎたとき (女性, 9才)」  
「衝動買いをしてしまうこと (女性, 18才)」

b. 制御不足：思い通りにできなかった

「伝えたいことが言葉にできないばかりに、変な表現をした (男性, 20才)」 「ピアノの発表会でうまく弾けなかったとき (女性,

15才)」

B. 変化に対応しうるための自覚が足りなかった

c. 注意不足：周囲に気を配れなかった

「高校受験の合格発表の時、不合格の同級生にその子の様子に気がつかず、『受かった?』と聞いてしまったこと (女性, 15才)」

「2才のいとこを抱っこして、あやしていたのだが、私の不注意でいところが床に滑り落ち頭を打たせてしまった (女性, 12才)」

d. 思慮不足：先のことを見越せなかった

「自分に自信をもてないうちに、好きな人に告白して大切な友達だったはずのその人を失ったとき (女性, 17才)」 「天窓を開けて外出したら大雨になった。心底開けた事を悔いた (女性, 20才)」 「高校の時、もっと勉強すればよかった。英語がわからない (男性, 18才)」

C. 課題への対策につながるほど自戒が強くなかった

e. 気力不足：真摯に取り組んでいなかった

「手紙を書くと言っていたのだが、書かずにいて、相手とのやり取りを失ったこと (男性, 11才)」 「中学や高校の卒業の時、やり残した事がたくさんあると感じて (男性, 15才)」 「中学卒業時、剣道部に入っていたが、2年間くらい幽霊部員になっていて、まともに出たら良かったなあ (男性, 16才)」

f. 努力不足：真剣に取り組んでいなかった

「大学受験を終えて、もっと勉強しておけば良かったと思ったこと (女性, 18才)」 「中学の部活で最後の大会の時、もっと練習すれば良かったと (女性, 15才)」

## 結 果

### 1. 後悔の対象としての分布

資料1に後悔の対象(何を後悔したのか)によって分類した3体系と、これを構成する12類型、および50特性における全体と性別、年齢区別の度数分布を示した。

1-1. 3体系の全体頻度 全体として、後悔体験の記述から判断された3体系の出現頻度は、『Ⅰ情愛を結ぶ接点』を失うことに対する後悔が128名(21.8%)、『Ⅱ日常における平静』を失うことに対する後悔は158名(27.0%)、『Ⅲ目的に対する成果』を失うことに対する後悔で300名(51.2%)となっており、『Ⅲ目的に対する成果』を失うことが、最も高い出現率を示す後悔の体験となった。

1-2. 3体系における構成比 『Ⅰ情愛を結ぶ接点』を失うことに対する後悔は、①身近な人への過失：閉塞(82名, 14.0%)、②身近な人との関係の悪化：崩壊(37名, 6.3%)、③身近な人への不実：脆弱(9名, 1.5%)を伴う3区分に分類された。内部の構成比としては、①過失が64.1%、②関係悪化は28.9%、③不実で7.0%となっており、身近な人への過失に伴う後悔が、最も高い比率を示していることが認められた。次に『Ⅱ日常における平静』を失うことに対する後悔は、④悪い行いをしてしまったこと：罪悪(50名, 8.5%)、⑤思わぬ痛手を受けてしまっていたこと：失策(61名, 10.4%)、⑥行き過ぎな行いをしてしまっていたこと：過大(32名, 5.5%)、⑦復元が困難な状況を自ら招いてしまっていたこと：自損(15名, 2.6%)を伴う4区分に分類された。内部構成比は、④罪悪が31.6%、⑤失策は38.6%、⑥過大で20.3%、⑦自損9.5%となっており、思わぬ痛手を受けること(失策)を伴う後悔が、最も高い比率を示していることがわかった。最後に『Ⅲ目的に対する成果』を失うことに対する後悔は、⑧中途半端になってしまっていた

こと：半端（88名、15.0%）、⑨機会を失ってしまったこと：逸機（36名、6.1%）、⑩関わることをやめてしまっていたこと：放棄（17名、2.9%）、⑪決着が着いてしまっていたこと：敗退（111名、18.9%）、⑫不本意な選択をしてしまっていた：錯誤（48名、8.2%）を伴う5区分に分類された。内部構成比は、⑧半端が29.3%、⑨逸機は12.0%、⑩放棄で5.7%、⑪敗退37.0%、⑫錯誤16.0%となっており、決着が着いてしまったこと（敗退）を伴う後悔が、この中では最も高い比率を示していることが認められるところとなった。

1-3. 12類型ごとの内部構成 体系ごとの種類の構成比とは別に、類型内のそれぞれの内容（場面）の比率を見てみた。

『I 情愛を結ぶ接点』を失うことに対する後悔 ①身近な人への過失（閉塞）を伴う後悔には4つの場面があるが、その中では、1）相手を傷つけてしまっていた場合が51.2%で過半数を示すような最も高い比率を示し、次いで2）薄情な対応をしてしまった場合が32.9%となっており、両方で8割を超える比率を示した。②身近な人との関係の悪化（崩壊）を伴う後悔4場面の中では、5）恋愛関係が破局してしまっていた場合32.4%と6）友人関係が断絶してしまっていた場合27.0%で過半数を占め、最頻値を2分するものになっていた。③身近な人への不実（脆弱）を伴う後悔2場面では、10）関係に虚偽をはさんでしまった場合と9）虚構の関係を築こうとしてしまっていた場合に同程度に2分されていた。

『II 日常における平静』を失うことに対する後悔 ④悪い行いをしてしまったこと（罪悪）を伴う後悔には5つの場面が分類されているが、その中で、13）不当な行為をしてしまっていた場合36.0%と14）義務に反する行為をしてしまっていた場合28.0%の2つで6割程度を示していた。⑤思わぬ痛手を受けてしまっていたこと（失策）を伴う7場面では、

16) 思惑が外れてしまっていた場合と 17) 自業自得になってしまっていた場合が同数29.5%で、両者で6割程度を示すところとなった。⑥行き過ぎな行いをしてしまったこと(過大)に伴う4場面はいずれも同数を示した。⑦復元が困難になってしまっていた(自損)3場面も、同様に、いずれの場面も同程度の比率を示した。

『Ⅲ目的に対する成果』を失うことに対する後悔 ⑧中途半端になってしまっていた場合(半端)を伴う後悔には5つの場面があるが、その中では、30)学習が不足してしまっていた場合が40名で45.5%となり、単独で半数程度を示していた。⑨機会を失ってしまっていた場合(逸機)を伴う後悔4場面では、37)告白をせずに終わってしまっていた場合が17名(47.2%)となり、半数程度を示すものとなった。⑩関わることをやめてしまっていた場合(放棄)を伴う2場面では、40)活動を途中で放棄してしまっていた場合が15名で88.2%となっていて、単独で9割に近い比率を示した。⑪決着が着いてしまっていた(敗退)6場面では、43)受験が不合格になってしまっていた場合が54名(48.6%)で半数程度に及んでいることが認められた。⑫不本意な選択をしてしまっていた(錯誤)4場面では、48)入学後に懸念を感じてしまっていた場合が23名(47.9%)で、単独で半数程度を示す比率が得られていることがわかった。

## 2. 後悔体験の性別における対象としての分布

資料1には性別の度数とともに、男女の対比比率(男性合計における構成比÷女性合計における構成比)を示し、これにより、1を下回るものが、男性の構成比が女性より高く、1を超えるものは、女性が男性よりも高いことを表した。どちらかの性別のみに見られる場面であった場合は、ダッシュ記号(—)を表すことにした。

その結果、3体系ごとの男女比では『Ⅰ情愛を結ぶ接点』を失うことに対する後悔が0.7、『Ⅱ日常における平靜』を失うことに対するものは0.8、『Ⅲ目的に対する成果』を失うことに対するものは1.3となっており、体系間では顕著な差が認められなかった。

しかしながら、個別の場面で見ると、女性のみに見られる場面としては、9) 虚構の関係、22) 自身の暴露、28) 甚大な被害、31) 時間の浪費、46) 選抜漏れ、47) 適正の無さの6場面があった。また、女性の方が2倍以上の比率を示していたもの(対比比率2.0以上)は、23) 衝動買い、32) 練習不足、36) 参加不可能、42) 上手にできないの4場面があった。特に、23) 衝動買いと32) 練習不足は男性に比べ3倍以上の高い比率を示すことが認められた。

反対に、男性のみに見られる場面としては、39) 申し入れ拒否の1場面のみで、男性の方が2倍以上の比率を示していたもの(対比比率0.5以下)は、3) 素直になれない、4) 迷惑をかける、6) 友人関係の断絶、7) 友人関係の悪化、17) 自業自得、18) 厚意裏目、19) 叱責を受ける行為、27) 深刻な怪我の8場面があった。特に、27) 深刻な怪我は女性に比べ3倍以上の高い比率を認めるところとなった。

### 3. 後悔体験時の「年令」区分の構成

図1は、資料1の右欄に示された後悔場面ごとの年令区分における分布を再構成し、年令区分ごとの後悔3体系の分布の推移を表したものである。これによると、幼年期においての『Ⅱ日常平静』喪失の体験を報告した者が、3～5才の後悔体験では7名中6名(85.7%)、6～8才では22名中13名(59.1%)となっており、3体系の中では単独で6割程度を超える比率を示していることが認められた。学童期においての『Ⅰ情愛接点』喪失を報告した者が、9～11才の体験としては35名中16名

(45.7%) となっており、半数程度の比率を示しているこの「I 情愛接点」喪失がこの頃の最も多い後悔体験となっていることがわかった。また、これにはやや劣るが、12～14才でも78名中23名(29.5%)で3割程度の比率になっており、他の年齢区分と比較すると一定程度の比率の高さを示すものであることが確認できた。次に、思春期・青年期においての『Ⅲ目的成果』喪失を報告した者が、15～17才では180名中106名(58.9%)、18～20才では233名中138名(59.2%)となっており、いずれも6割程度で3体系中最も高い比率を示していることが認められた。最後に、それ以降の年代である21～26才としては、15名中8名(53.3%)が体験した『Ⅱ日常平静』喪失に、過半数の最も高い比率が示されていることが確認された。

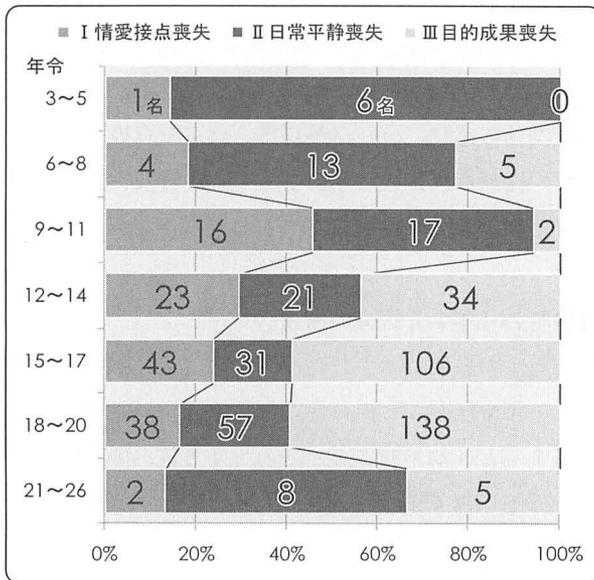


図1 年齢区分による後悔3体系の分布の推移

#### 4. 後悔体験にいたる「作用」の分布

図2は、後悔の体験に至る直接的起因となったと思われる「作用」によって分類された頻度分布を示したものである。これによると、自覚ができずに変化への対応ができなかったとする「d. 思慮不足」が574名中203名（35.4%）で最も多い「作用」として認められた。また、それに続く意識水準の高い方の「e. 気力不足」「f. 努力不足」を合わせると392名（68.3%）におよび、全体の7割近い比率を示すものであることが確認できた。

次に、これを作用別に見てみると、『I 情愛接点』喪失の後悔体験の比率が最も高いものが、「a. 制動不足」で107名中の43名で40.2%であること、『II 日常平静』喪失の比率が最も高いものは「c. 注意不足」で

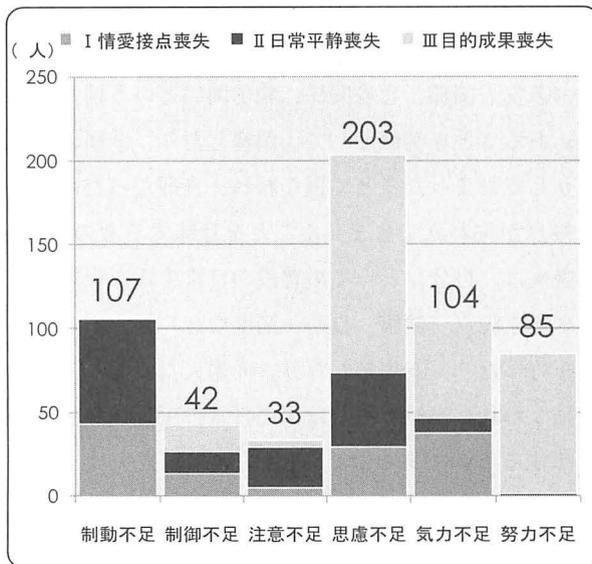


図2 後悔にいたる作用別の後悔3体系の分布構成

33名中24名で72.7%、『Ⅲ目的成果』喪失では「f. 努力不足」が85名中84名で98.8%となっていることがわかった。更に、最も関与時間の短い段階として考えられる「a. 制動不足」では『Ⅲ目的成果』喪失はわずか1名(0.9%)で皆無に近く、反対に最も関与時間の長い段階での状態として考えられる「f. 努力不足」では『I情愛接点』と『II日常平静』の喪失が皆無に近くなっていることも認められるところとなった。

## 考 察

### 1. 後悔体験の特徴

1-1. 後悔体験586の記述から、どのような場面に対して後悔感情が生じているかについて分類した結果、すべての後悔の体験は、『I情愛を結ぶ接点』を失うことに対する後悔、『II日常における平静』を失うことに対する後悔、『III目的に対する成果』を失うことに対する後悔のいずれかのものであった。『I情愛接点』喪失は、自分にとっての身近で大切にすべき友人関係、恋愛関係、親子関係という情愛を結べるはずの関係性が、あることを契機として①閉塞したり、②崩壊したり、③脆弱になったりしてしまったことで損なわれ、良好だったはずの関係性を結んでいた接点が失われてしまったことを意味するものであった。『II日常平静』喪失は、自分にとっての普段の日常生活を保証してくれていた大切にすべき立脚点(健康・良心・節度など)が、あることを契機として④罪悪を行ったり、⑤失策したり、⑥過大だったり、⑦自損したりしたことで損なわれ、当然だったはずの日常の平静性が失われてしまったことを意味するものであった。『III目的成果』喪失は、自分にとって大切だと思われる技術、能力、資格、栄誉などの獲得を目指した目標が、あることを契機として⑧中途半端で終えたり、⑨機会を逃したり、⑩途中で放棄したり、⑪敗退したり、⑫錯誤があったりして、可能性や機会

があったにも関わらず成果が得られなかったことを意味するものであった。これにより、それぞれの体系の特徴から中心的な意味を理解することが可能となり、後悔の感情が、自分にとって大切だったはずのモノ（情愛接点・日常平静・目的成果）を失う（lossする）ことに対して生じていることが示唆されることとなった。

ここでは、喪失感情そのものである「悲しい」との違いが、喪失の可能性の点にあることを考えるものとなっている。「悲しい」では、その喪失の特徴として、自分の力ではどうしようもない、避けられないものであったことがあげられている（鈴木賢男・鈴木国威・上杉喬 2002）。少なくとも本人がそのように判断しているということであるが、典型例としては、身近な人の死に対する悲しみなどがあり、自分にとってどんなに大切な人であっても、その死を避けるための直接的な手だてがあるわけではなく、何もできずにそれを享受するのみしかないところに、悲しみの本質がある。しかしながら、「後悔」においては、喪失の可能性を十分に意識することができず、それ故、喪失を回避する手だてがあったにも関わらずに、自分でそれを成しえずに、結果として喪失をしてしまう、という特徴を持っているものと考えられるのである。また、失ったモノが大切なモノであったことに後から気がつくという特徴も合わせもっている。つまり、本当は大切だったはずのモノを、きちんと意識することができないまま、それを失っていたということになるのである。『Ⅰ情愛接点』喪失での①閉塞、②崩壊、③脆弱も、本人の過失や不実などの関与のいたらなさによって生じたものとされているし、『Ⅱ日常平静』喪失においても、④罪悪、⑤失策、⑥過大、⑦自損行為は全て本人の関与を契機としている。『Ⅲ目的成果』喪失では更に明確に、体験の記述中に「もっと～していれば」という表現が加えられていて、自己の関与に関しての反省さえ伺えるものであった。

1-2. 次に、3体系の比較によって、『Ⅲ目的成果』喪失に対する後悔が、最も出現比率が高く全体の半数を占めるものであったことにより、この『Ⅲ目的成果』喪失が典型的な後悔体験を示しうる場面であることが示唆された。上述したように、この体系内の体験記述には「もっと勉強していればよかった」「もっと練習していればよかった」などと、明確に自己反省を述べているものが多く、自己の関与のいたらなさが後悔体験の特徴であることをよく表している。また、この体系に含まれる5類型それぞれの中で最も高い比率を示した場面は、⑧中途半端では「30. 学習の不足」、⑨機会遺失では「37. 告白しないまま」、⑩途中放棄では「40. 部活を途中でやめた」、⑪結果敗退では「43. 受験不合格」、⑫選択錯誤では「48. 入学後に懸念」となっており、これらが典型例としての主要な場面ということになると思われるが、ほとんどが学校生活を通して体験されることであり、その意味においては、他の体系の場合とは異なり、目的や課題が設定される学校という機関において、一定の比較的長い準備期間を用意していることが了解されるものであるため、喪失回避の可能性がその分高まるあるいは広がるものではあるが、それに対する関与には時間を有効に用いるなど、ある程度の個人の強い意志が必要となることが伺えるものである。つまり、表面上は猶予期間が与えられているように思えるが、実際のところは目標に向けて内省を繰り返し、十分な活動に励む必要のある状況だったはずなのである。ところが、比較的長期にわたる意志の強さを十分に保てていなかったこと、それが弛んでしまったこと、油断をしてしまったことが、喪失につながってしまったということなのであろう。この種の典型例としてあげられた後悔場面に見られる「もう少し～していれば」という記述は、関与すべき時に、一種の“油断”が生じていたという以上の特徴を端的に表すものと考えられた。

1-3. 記述された体験の年齢区分における出現率は、全体としては、18～20才が233名(39.8%)、15～17才が180名(30.7%)で、合わせて7割程度におよぶものが思春期から青年期にかけての体験として報告しており、調査対象者の年齢からすれば直近の年齢についての想起であったことが示された。しかしながら、年齢区分ごとの後悔3体系の分布を見てみたところ、幼年期から学童期前半(3～8才)での後悔としては、『Ⅱ日常平静』喪失に対するものが高い比率を示しており、学童期後半～思春期前半(9才～14才)では『Ⅰ情愛接点』喪失に対するものの比率が上昇し、思春期後半～青年期(15～20才)では『Ⅲ目的成果』喪失に対する比率が急増するものであることがわかった。このことは、上述した通り、後悔感情の体験が典型としては『Ⅲ目的成果』喪失に対するものであるものの、この感情が各年代の置かれている環境によって関心のある状況が変わりうるものであることを予見させるものであった。特に、思春期～青年期では学校生活が生活の中心となり、そこにおいては達成されるべき課題というものが暗黙のうちにも設定されてくるので、必然的により強い関心が向けられるものとなるのであろう。とすれば、逆に幼年期～学童期前半における関心の中心は『Ⅱ日常平静』であることになり、おそらくこれに対する体験が、後悔の感情の源泉となるものと思われた。幼少年期(比較的年齢が小さい頃)においては、日常の何気ない自分の振る舞いによって、自分がどのような影響を被るかということについては比較的無頓着である傾向にあると思われる。また、日常的なことは、特に準備したり、特別な関与を必要とするわけではなく、いつもと変わることなく平静な状態が保たれていることが多い。そこに、漠然としてはいるが、自分や環境に対する一種の安心感が得られることは当たり前のことにもなりうるのであろう。ところが、そこから一転して『Ⅱ日常平静』の思わぬ喪失が起こることを体験する場合はあ

る。何気なくやってしまったことが悪いことだったり (④罪悪)、災難につながったり (⑦自損) することはそのよい例であろう。初期の頃に体験される後悔感情としては、このような「何気なさ」によって間髪をいれずに喪失が生じたようなことが比較的強く記憶に残っているようである。従って、例え何事もない日常であっても、はっきりとした考えや意図をもたず、自分が「何気なく」振る舞うことで、一変して喪失につながることを了解しえたことが考えられるものとなり、後悔感情の原初的な特徴には、端緒として自分の漠然とした何気ない思いがあることが示唆されるものとなった。この特徴が消えてなくなることがないとなれば、他の場合の後悔感情においても、この特徴は端緒 (契機) として残ることになり、自分の「何気ない」意識というものが、後悔感情の中核的な特徴、言わば、本質的な特徴として考えうることを予見するものとなった。

1-4. 後悔の場面の分布を性別で比較した場合、全体としての差や体系ごとの差は認められなかったものの、個別の場面では、男性の方が比率が高かったものが『I 情愛接点』喪失の3) 素直になれなかった、4) 迷惑をかけてしまった、6) 友人関係が断絶してしまった、7) 友人関係が悪くなってしまった、『II 日常平静』喪失の17) 自業自得、18) 厚意裏目、19) 叱責された、27) 怪我をしたなどのように、比較的能動的関与が考えられるものであったのに対して、女性の方の比率が高かったものは『III 目的成果』喪失の31) 時間浪費、32) 練習不足、36) 参加機会遺失、42) 上手にできない、46) 選抜漏れ、47) 適性に疑問をもつなどのように、比較的受動的関与のまま流されてしまい、結果として自分の能力や気持ちに合わなくなってしまっているものと考えることができた。したがって、後悔には自分の意志的な関与を働かせた意図的判断による能動性のものと、自分の意志的な関与を比較的働かせない容認的

判断による受動性のものと2種類の様態があり、能動性の後悔は男性に多く体験され、受動性の後悔は女性に多く体験されることが、一定程度の傾向として予見されうるものとなった。

## 2. 後悔体験にいたる状態

後悔の感情体験を、場面の結果的な意味ではなくて、自分（主体）が自分と関連性のある対象となるモノ（客体）と、どのように作用しあつたのかについて分類したところ、全体として、後悔の感情は、主体が客体と関わる際に当然必要となる対処の仕方に起因するものであること、また、そのことを主体自体が認めているとこで生じているものと考えることができた。一つにはA. 自制（a. 制動・b. 制御）が足りなかったこと、次にB. 自覚（c. 注意・d. 思慮）が足りなかったこと、最後にC. 自戒（e. 気力・f. 努力）が足りなかったことの3つの状態に分類されたが、これらが意味しているのは、問題解決的な対処能力の種別（知的・技術的）やその水準（高さ）ではなくて、その前提となるような一般的で基礎的な対処が適正水準にいたっていないということである。これは、喪失を回避できる可能性が、誰でも働かせうる心的資源（自制や自覚、自戒）を適正量用いれば避けられたはずであるという判断、あるいは、実際そんな簡単なことすらしていなかったという判断に基づいて、後悔感情が直接的に生起することを示唆するものであると考えることができた。つまり、最低限必要なことさえしていなかったこと、心的資源の活用が最低水準にもいたっていなかったということが、後悔感情が生起するための最も重要な作用因となっていることを示唆するものとなろう。

更に、この分類においては、比較的自動的・無意識的で短時間の作用である a. 制動から始めて、同じ「A. 自制」に含まれる b. 制御、それ

から「B. 自覚 (c. 注意、d. 思慮)」、「C. 自戒 (e. 気力、f. 努力)」と進むに従って、比較的随意的・意志的で長期間の作用であることが考えられた。これは、関与時間の水準とも考えることができ、長期間の作用になるほど、実際には、一定の猶予期間内で何度も振り返るチャンスがあったはずで、その機会を最後までことごとく無為にしてきたことを意味することになるのであろう。d. 思慮以降の比較的長期間の方の頻度 (d. e. f の3分類) が全体の7割に及んでいることは、後悔を顕著に感じたことが、ただ単純に直近の出来事を多く思い浮かべたということではなく、チャンスが何度もありながら無為にしてきたことでの累加的な作用が後悔感情をより強くしたからではないかと想定することが可能となった。

### 3. 後悔感情の生起

以上のことから、後悔体験には、『Ⅰ情愛を結ぶ接点』『Ⅱ日常における平静』『Ⅲ目的に対する成果』を失うことに対する3体系の後悔があり、その後悔感情が生起する特徴は、(A) 自分にとって大切だったはずのモノ (情愛の接点・日常の平静・目的の成果) に対して、(B) はっきりとした考えや意図ももたずに接したことを契機として、(C) いつの間にか油断が生じて、(D) 最低限必要な対処 (自制・自覚・自戒) すらしないまま、(E) 結果として大切なモノを失ってしまった場合に、またそのことを自分が認めた場合に、(F) 自分に向けて、生じるものであると考えることができた。(A) は後悔感情のための主題となる対象、(B) は主題に対する欲求水準、(C) は関与している際の意識水準、(D) は主題に要求される対処水準、(F) は感情が向けられる対象を表すものである。(B) (C) (D) のそれぞれの水準は、最低限の適正量 (閾値) にも満たずに不足している状態にあるものと了解できた。

資料1 後悔体験の対象別分布と年齢区分別分布

内 容		全体		性別度数		性別(%)		男女の% 比	年齢区分								
		度数	%	男性	女性	男%	女%		4-5	6-8	9-11	12-14	15-17	18-20	21-26	不明	
I 恋愛を結ぶ 接点	閉塞	1 相手を傷つけてしまっていた場合	42	7.2	14	28	7.1	7.2	1.0	0	2	7	7	12	13	0	1
		2 薄情な対応をしてしまっていた場合	27	4.6	8	19	4.0	4.9	1.2	0	0	6	5	11	4	1	0
		3 素直になれなくなっていた場合	7	1.2	4	3	2.0	0.8	0.4	0	0	2	2	2	1	0	0
		4 迷惑をかけてしまっていた場合	6	1.0	4	2	2.0	0.5	0.3	0	0	0	2	0	4	0	0
	崩壊	5 恋愛関係が破局してしまっていた場合	12	2.0	7	5	1.2	1.3	1.1	0	0	0	2	3	6	1	0
		6 友人関係が断絶してしまっていた場合	10	1.7	6	4	3.0	1.0	0.3	0	1	1	2	6	0	0	0
		7 友人関係が悪くなってしまっていた場合	7	1.2	4	3	2.0	0.8	0.4	1	1	0	1	4	0	0	0
		8 関係に亀裂が入ってしまっていた場合	8	1.4	3	5	1.5	1.3	0.9	0	0	0	2	3	3	0	0
	脆弱	9 虚構の関係を築こうとしてしまっていた場合	4	0.7	0	4	0.0	1.0	-	0	0	0	0	1	3	0	0
		10 関係に虚偽をばさんでしまっていた場合	5	0.9	2	3	1.0	0.8	0.8	0	0	0	0	1	4	0	0
(小計)		128	21.8	52	76	26.3	19.6	0.7	1	4	16	23	43	38	2	1	
									0.8	3.1	12.5	18.0	33.6	29.7	1.6	0.8	
II 日常における 平 静	罪悪	11 法律違反を犯してしまっていた場合	7	1.2	3	4	1.5	1.0	0.7	1	2	1	0	1	2	0	0
		12 不正行為をしてしまっていた場合	8	1.4	3	5	1.5	1.3	0.9	0	2	2	1	1	1	0	1
		13 不当な行為をしてしまっていた場合	18	3.1	7	11	3.5	2.8	0.8	3	0	5	5	3	1	0	1
		14 義務に反する行為をしてしまっていた場合	14	2.4	6	8	3.0	2.1	0.7	1	1	1	2	5	4	0	0
		15 その他(特殊ないけないこと)	3	0.5	2	1	1.0	0.3	0.3	0	0	1	0	0	2	0	0
	失策	16 悪感の外れてしまっていた場合	18	3.1	6	12	3.0	3.1	1.0	0	1	0	4	4	6	2	1
		17 自業自得になってしまっていた場合	18	3.1	11	7	5.6	1.8	0.3	1	3	0	2	4	6	2	0
		18 厚意が裏目に出てしまっていた場合	3	0.5	2	1	1.0	0.3	0.3	0	1	0	1	0	1	0	0
		19 叱責を受けることになってしまっていた場合	5	0.9	3	2	1.5	0.5	0.3	0	1	0	1	2	1	0	0
		20 寝過ごしてしまっていた場合	5	0.9	2	3	1.0	0.8	0.8	0	0	0	1	1	2	0	1
		21 肝心な事を忘れていた場合	5	0.9	2	3	1.0	0.8	0.8	0	0	1	1	2	1	0	0
		22 自分のことを暴露してしまっていた場合	7	1.2	0	7	0.0	1.8	-	0	1	0	1	1	3	1	0
	過大	23 衝動買いをしてしまっていた場合	8	1.4	1	7	0.5	1.8	3.6	0	0	0	0	1	7	0	0
		24 過剰に摂取してしまっていた場合	8	1.4	3	5	1.5	1.3	0.9	0	0	0	1	1	6	0	0
		25 自分本位になってしまっていた場合	8	1.4	3	5	1.5	1.3	0.9	0	0	0	1	2	4	1	0
		26 言動が軽薄になってしまっていた場合	8	1.4	2	6	1.0	1.5	1.5	0	0	1	0	1	4	2	0

感情体験の分析 (X)  
—後悔について—

自損	27	深刻な怪我をできてしまった場合	4	0.7	3	1	1.5	0.3	0.2	0	0	1	0	2	1	0	0	
	28	甚大な被害を受けてしまった場合	6	1.0	0	6	0.0	1.5	-	0	1	1	0	0	3	0	1	
	29	大事な物を無くしてしまった場合	5	0.9	2	3	1.0	0.8	0.8	0	0	3	0	0	2	0	0	
(小計)			158	27.0	61	97	30.8	25.0	0.8	6	13	17	21	31	57	8	5	
										3.8	8.2	10.8	13.3	19.6	36.1	5.1	3.2	
III 目的に対する成果	半端	30	学習が不足してしまっていた場合	40	6.8	11	29	5.6	7.5	1.3	0	0	0	2	11	24	1	2
		31	時間を浪費してしまっていた場合	17	2.9	0	17	0.0	4.4	-	0	0	0	0	6	8	1	2
		32	練習が不足してしまっていた場合	14	2.4	2	12	1.0	3.1	3.1	0	0	0	2	7	4	0	1
		33	開始が遅くなってしまっていた場合	9	1.5	2	7	1.0	1.8	1.8	0	0	0	1	4	3	0	1
		34	経験せずに終わってしまっていた場合	8	1.4	3	5	1.5	1.3	0.9	0	0	1	1	4	1	0	1
	逸脱	35	伝えられなくなってしまっていた場合	9	1.5	4	5	2.0	1.3	0.6	0	1	0	2	2	2	1	1
		36	参加できなくなってしまっていた場合	5	0.9	1	4	0.5	1.0	2.0	0	0	0	0	0	5	0	0
		37	告白をせずに終わってしまっていた場合	17	2.9	8	9	4.0	2.3	0.6	0	0	1	1	8	6	1	0
		38	手に入れられなくなってしまっていた場合	5	0.9	2	3	1.0	0.8	0.8	0	0	0	0	1	4	0	0
	放棄	39	申し入れを断ってしまっていた場合	2	0.3	2	0	1.0	0.0	-	0	0	0	0	0	2	0	0
		40	活動を途中で放棄してしまっていた場合	15	2.6	5	10	2.5	2.6	1.0	0	0	0	3	9	2	1	0
	敗退	41	試合に負けてしまっていた場合	20	3.4	6	14	3.0	3.6	1.2	0	1	0	5	8	6	0	0
		42	上手にできなくなってしまっていた場合	15	2.6	3	12	1.5	3.1	2.0	0	1	0	3	4	6	0	1
		43	受験が不合格になってしまっていた場合	54	9.2	17	37	8.6	9.5	1.1	0	0	0	3	11	40	0	0
		44	評価が下がってしまっていた場合	11	1.9	3	8	1.5	2.1	1.4	0	0	0	3	6	2	0	0
		45	落第をしてしまっていた場合	8	1.4	3	5	1.5	1.3	0.9	0	0	0	0	0	7	0	1
		46	選抜に漏れてしまっていた場合	3	0.5	0	3	0.0	0.8	-	0	0	0	0	2	1	0	0
	錯誤	47	適性の無さを感じてしまっていた場合	4	0.7	0	4	0.0	1.0	-	0	1	0	1	1	1	0	0
		48	入学後に懸念を感じてしまっていた場合	23	3.9	7	16	3.5	4.1	1.2	0	0	0	4	13	6	0	0
		49	妥協をしてしまっていた場合	13	2.2	4	9	2.0	2.3	1.1	0	1	0	3	6	3	0	0
50		進路に誤りを感じてしまっていた場合	8	1.4	2	6	1.0	1.5	1.5	0	0	0	0	3	5	0	0	
(小計)			300	51.2	85	215	42.9	55.4	1.3	0	5	2	34	106	138	5	10	
										0.0	1.7	0.7	11.3	35.3	46.0	1.7	3.3	
合 計			586	100.0	198	388				7	22	35	78	180	233	15	16	
										1.2	3.8	6.0	13.3	30.7	39.8	2.6	2.7	

参考文献

- Izard, C. E. 比較発達研究会訳 感情心理学 ナカニシヤ出版 1996
- Plutchik, R. The multifactor-analytic theory of emotion *Journal of Psychology* 50 153-171 1960
- Rozin, P., Haidt, J., McCauley, C. R. 2004 Disgust. In Lewis, M., Haviland-Jones, J.M. (Eds.), *Handbook of Emotions: Second Edition*, New York : The Guilford Press, Pp.637-653
- 上杉喬 感情イメージの研究 人間科学研究 第3号 22-38 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究 (II) —労働場面における感情イメージ—  
人間科学研究 第4号別冊 29-40 1983
- 上杉喬 感情イメージの研究 (III) —労働場面における感情イメージの  
諸関連— 人間科学研究 第5号別冊 11-20 1984
- 上杉喬 感情イメージの研究 (IV) —対象による違いと性による違い—  
人間科学研究 第11号 1-11 1989
- 上杉喬 感情イメージの研究 (V) —SD法による感情イメージの検討  
— 人間科学研究 第20号 68-77 1998
- 上杉喬・鈴木賢男 感情イメージの研究 (VI) —感情価とパーソナリ  
ティー特性との関連— 生活科学研究 第22号 121-132 2000
- 上杉喬・榎場真知子・馬場史津 感情体験の分析 —嫉妬・憎い・怒り  
について— 生活科学研究 第24号 25-40 2002
- 鈴木賢男・鈴木国威・上杉喬 感情体験の分析 (II) —喜び・悲しい  
について— 言語と文化 第15号 42-66 2002
- 上杉喬・岡本かおり・平宮正志 感情体験の分析 (III) —驚き・寂し  
い・愛しい・空しいについて— 生活科学研究 第25号 61-89  
2003
- 鈴木賢男・上杉喬 感情体験の分析 (IV) —失望について— 人間科学

研究 第25号 63-75 2003

鈴木賢男・上杉喬 感情体験の分析（Ⅶ）—満足について— 生活科学

研究 第28号 13-34 2006

鈴木賢男 感情体験の分析（Ⅷ）—嫌悪について— 生活科学研究 第

29号 213-234 2007

鈴木賢男 感情体験の分析（Ⅸ）—ためらいについて— 生活科学研究

第30号 77-91 2008

右山裕一・上杉喬 感情体験の分析（Ⅴ）—屈辱について— 言語と文

化 第16号 81-100 2003

上杉喬・芝塚梨華・高橋直美・平宮正志 感情体験の分析（Ⅵ）—恐

れ・充実・恥ずかしいについて— 生活科学研究 第26号

79-108 2004